

初期近代英語における動詞の命題補部

—特に現代英語において、動名詞補部はとるが不定詞補部はとらない動詞に
 ついての定量言語学的アプローチ—*1)

The English Complementation Patterns in the Early Modern English Featuring the Verbs which can take Gerundial complements but not Infinitival Counterparts in Present-Day English.

藤内響子
 Kyoko Fujiuchi

[Abstract]

Studies of English complementation revealed that, while there is a degree of flexibility in the use of gerunds and infinitives in Modern English, a steady and general increase in the use of the gerund can be observed. This is one of several developments in complement patterns that have come to be known as Great Complement Shift, a term first used in print by Rhodenburg (2006). Iyeiri (2010) reanalyzed this Great Complement Shift as to be a combination of two different shifts: (a) the shift from *that*-clause to *to*-infinitives, **the first complement shift**; and (b) the shift from *to*-infinitives to gerunds, **the second complement shift**. There are not many detailed observations on the systematic evolution of complementation in the history of English as of yet. This study observed the detailed changing patterns of the complementation in the Early Modern English when the first complement shift was most prominently in progress; examining 14 verbs which can take gerundial complements but not infinitival counterparts in Present-Day English from a quantitative point of view, and found that not a few verbs concerned could not experience the first complement shift, and underwent the second complement shift as early as 1600.

キーワード：定量言語学アプローチ、不定詞補部、動名詞補部、大補部推移

Key words: quantitative corpus linguistics, infinitival complement, gerundial complement, Great Complement Shift

1. はじめに

小論においては、①のような単文を前提となる命題として定義した場合、それから派生した②～⑥を命題補部と定義する。それを踏まえて、英語の動詞がその補部に命題を選択する場合の、特に

②～④の *that* 節、*to* 不定詞、および動名詞の3種類の命題補部が初期近代英語においてどのような振る舞いを経ながら発達しているか調査することを目的とする。

① 単文

[The start-up company developed a new technology].

② that 節

The news said [that the start-up company developed a new technology].

③ to 不定詞

The start-up company tried [to develop a new technology].

④ 動名詞

The start-up company denied [having developed a new technology].

⑤ 派生名詞句

The start-up company tried to hide [its development of a new technology].

⑥ 小節

The venture capital helped [the start-up company develop a new technology].

that 節、to 不定詞、および動名詞は歴史上競合関係にあり今に至っている。Rohdenburg (2006, pp.159-160) は、このような命題補部の競合関係を the Great Complement Shift (大補文推移) と名づけ、次のように大きく 5 種類に分けて定義している。

- the rise of the gerund (both “straight” and prepositional) at the expense of infinitives (and *that* clauses)
- the establishment of linking elements introducing dependent interrogative clauses (as in *advice on how to do it*)
- the expansion of (subject-controlled, future-oriented) infinitive interrogative clauses at the expense of finite *wh*-clauses (e.g. after verbs like *hesitate*)
- changes involving the rivalry between marked and unmarked infinitives (e.g. after the verb *help*)
- the simplification of the relevant control properties resulting amongst other things in the demise or obsolescence of unspecified object deletions with manipulative verbs like *order*.

今回行った調査にもっとも関連があるのは、その一番初めの定義である、“the rise of the gerund (both “straight” and prepositional) at the expense of infinitives (and *that* clauses)”である。京都大学の家人氏は、*forbear* や *avoid* 等、否定の意味を内包した 11 の動詞の歴史的発達について詳細な調査を行った、Iyeiri (2010, p.7) において、この the Great Complement Shift を更に、the first complement shift と the second complement shift の 2 段階に分類し、前者を主に that 節から to 不定詞への移行、後者を to 不定詞から動名詞への移行と定義している。the first complement shift が最も顕著にみられるのは中英語後期から初期近代英語にかけて、the second complement shift は近代英語後期に特徴的に表れるとされる。つまり後期中英語から初期近代英語にかけて that 節から to 不定詞節への shift が起こり、後期近代英語において更に to 不定詞から動名詞への shift が起こったと考えられる。したがって、初期近代英語においては、主に that 節と to 不定詞節に競合関係がみられ、また、後期近代英語における動名詞の発達の萌芽が観察されるはずである。

更に、that 節、to 不定詞、および動名詞の 3 種類の命題補部に関しては、それらを目的語として従える動詞にも興味深い現象が観察される。現代英語においては、大きく分けて次のような 4 つのカテゴリーパターンがあり、動名詞か to 不定詞かどちらか一方しか目的語にすることは出来ない動詞がある一方で、動名詞も to 不定詞も同じように従えることが出来る動詞も存在する。また、*try* や *forget* のように目的語が動名詞の場合と不定詞の場合とでは意味が異なるものもある。

カテゴリー1

You should avoid *eating* just before you go to bed. (寝る直前に食べるのは、避けるべだ。)

の例にみられるように、動名詞を目的語としてとるが不定詞を目的語にすることは出来ない動詞。admit, avoid, consider, deny, enjoy, escape, finish,

imagine, mind, miss, practice, quit, stop, suggest, give up, put off 等がこのタイプに属する。

カテゴリー2

I don't care *to have* coffee after dinner. (夕食後にコーヒーを飲みたいとは思わない。)

の例にみられるように、不定詞を目的語としてとるが動名詞を目的語にすることは出来ない動詞。

care, decide, desire, expect, hope, manage, mean, offer, pretend, promise, refuse, want, wish 等がこのタイプに属する。

カテゴリー3

a. I'll never forget *meeting* him. (私は、彼に会ったことを決して忘れない。)

b. Don't forget *to meet* him. (彼に会うのを忘れないでね。)

の例にみられるように、目的語が動名詞の場合と不定詞の場合とでは意味が異なる動詞。

forget, remember, regret, try 等がこのタイプに属する。

カテゴリー4

a. She began *to run/ running*. (彼女は走り出した。)

の例にみられるように、目的語が動名詞でも不定詞でもどちらでもとれる動詞。

begin, cease, continue, hate, intend, like, love, neglect, start 等がこのタイプに属する。

多くの文法書が、なぜ動詞によってこのような違いが生じるのか、主に上記のカテゴリー3に属する try のような動詞に注目して、to 不定詞補部と動名詞補部の意味的な差から説明しようと試みている。例えば Quirk et al. (1985, p.1191) は “As a rule, the infinitive gives a sense of mere ‘potentiality’ for action ... while the participle gives a sense of the actual ‘performance’ of the action itself” と述べ、⑦と⑧を比較している。

⑦ Sheila tried to bribe the jailor.

⑧ Sheila tried bribing the jailor.

このような文法的解説の元となる研究について、Vosberg (2003b, p.199)は Bolinger (1968, p.115)や Visser (*HS* ; Part Two, p.1090)を挙げ、Rudanko 等が続く。Rudanko (1989, p.149) が “The preponderance of verbs of positive volition may be connected with the old force of *to*, as an element expressing purpose This suggestion receives some support from the *for to* pattern, which was also found to co-occur with verbs expressing volition.” と述べていることからわかるように、3人とも、to 不定詞の一部を構成している前置詞 *to* の意味に注目し、動名詞との意味の差を説明しようとしている。確かに to 不定詞の *to* はそもそも前置詞の *to* であり、目的や目的地の意味を含んでいるので、to 不定詞の中に元々未来志向が備わっていると考察することには整合性があると思われる。しかしながら、動名詞の -ing 形の中に本来的に過去志向性が宿っているとは考えにくい。また to 不定詞は、その発達過程で過去を示す複合形である完了形を獲得しているから、便宜上動名詞しか過去を担う形が無かったというわけでもない。にもかかわらず、特に remember や forget のような retrospective verbs と呼ばれる動詞は、慣習的に to 不定詞と動名詞を使い分けることによって tense の差を示すように発達してきた。加えて、need, want 等の動詞に続く場合、動名詞は to 不定詞の場合と異なり、複合形を取らずに受身の意味を表すことも出来る。動名詞補部が持つ、このような時と場合に応じたさまざまな意味の変容は、いつ頃いかにして獲得されたものなのだろうか。また、仮に to 不定詞と動名詞の間にこれほど異なる意味的要素が根源的に存在するのであれば、例えば begin や like のように to 不定詞も動名詞も同じ様に従えることが出来る動詞の存在をどのように考えればよいのであろうか。このように、簡単には解決しがたい問題が複雑に絡んでいることがわかる。

そこで本研究においては、定量言語学的アプローチを用いて、特に不定詞と動名詞および *that* 節が、動詞の命題補部として、歴史的にどのような競合関係にあったのか調べ、更にその結果を考慮した

うえで、それによって、現代英語における動詞の構造や性質を再分析する事が可能であるのか探ってみてみたいと思う。当然のことながら、調査は近代英語全般にわたって行うべきであるが、時間的な制約もあるので先ず初期近代英語の調査を先行する。

調査に用いたコーパスは、1500年から1710年までの170万語以上の、個人の手紙や文学作品、哲学、裁判記録など様々なジャンルのテキストを含んでいる、Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)²⁾で、CorpusSearch2、AntConc 3.2.1wを分析ソフトとして使用した。³⁾

今回調査を行ったのは、上述の4つのパターンの動詞のうち、カテゴリー1の、“You should avoid *eating* just before you go to bed.”(寝る直前に食べるのは、避けるべきだ。)の例にみられるような、「動名詞を目的語としてとるが不定詞を目的語にする

ことは出来ない動詞」に属する動詞群である。admit、avoid、consider、deny、enjoy、escape、finish、imagine、mind、miss、practice、quit、stop、suggest、の14動詞を調査した。このうち、admit、escape、quitの3動詞には用例が見られなかった⁴⁾。

それぞれの動詞に関する調査結果は、後で見ることにして、まずは全体像から見ていきたいと思う。

2. 全体像

表1は調査結果全体をまとめたものである。1500年から1710年の期間を50年ごとに4つに分け、Period 1からPeriod 4として、表にまとめた。Period 1は1500～1550年、Period 2は1550～1600年、Period 3は1600～1650年、Period 4は1650～1710年に対応している。一番左端はそれぞれの時代が含んでいるコーパスの総数である。

表 1									
Corpora		不定詞		動名詞		定形節			計
111	Period 1	8	21.62%	2	5.40%	27	72.97%		37
99	Period 2	22	20.95%	8	7.61%	75	71.42%		105
98	Period 3	2	11.11%	3	16.66%	13	72.22%		18
139	Period 4	6	6.12%	10	10.20%	82	83.67%		98
447	Sum	38	14.72%	23	8.91%	197	76.35%		258

先ほども述べたように、さまざまな情報を考え合わせると、初期近代英語においては、時代を経るごとにthat節に対してto不定詞が優勢になっていく状況がみられ、またそれと同時に、後期近代英語に見られる動名詞の発達の萌芽が観察されるのではないかという予測が成り立つ。加えて、英語におけるcomplement shiftとは、歴史的にみれば動名詞補部が勢力を確立していく過程であると考えられるのであるから、今回調査を行った「動名詞を目的語としてとるが不定詞を目的語にすることは出来ない動詞」は、最も早くshiftが完成に近づいた類の動詞である可能性がある。そうであれば、the second complementが起きるとされる以前

の初期近代英語においても、既に動名詞補部の躍進が顕著に確認できるかもしれない。

しかしながら、表1をみるとその予測は裏切られる。that節に代表される定形節補部は、どの時代においても全体の七割以上をコンスタントに占めている。むしろ時代を経るにつけその割合を増しており、Period 4ではそれまでの時代より一気に10%以上増加して全体の約84%を占めるに至っている。一方で、不定詞補部はPeriod 1の約22%から加速度的に減少の一途を辿り、Period 4では全体の6%ほどを占めるに過ぎない。したがって、この2種類の補部を比較する限り、明らかにthe first complement shiftに逆行したshiftが生じている

といわざるを得ない。

次に、不定詞補部と動名詞補部の関係についてみしてみる。不定詞の補部が初期近代英語全体で 38 例であるのに対して、動名詞の補部は合計で 23 例となっている。不定詞の方が多少数では勝っているとはいえ、動名詞補部もそこまで遜色のない数字である。しかも先ほど述べたように、不定詞補部は加速度的に減少の一途を辿っていくが、逆に動名詞補部は時代ごとに勢いを増している。具体的には Period 1 では、不定詞 8 例に対して動名

詞 2 例、Period 2 では、不定詞 22 例に対して動名詞 8 例、Period 3 以降では形勢が逆転し、不定詞 2 例に対して動名詞 3 例、Period 4 では、不定詞 6 例に対して動名詞 10 例となっている。これを見ると、このカテゴリーの動詞においては、近代英語後期に特徴的に表れる the second complement shift が、既に 1600 年頃から始まっていると考えることが出来る。

表 2 は用例をより詳細に、構造別にみたものである。

表 2		無標	意味上の主語	完了形	受動態	完了受動態	進行形	接続詞 + 原形	wh 句付き	
Infinitive	Patterns	to	for to	to have	to be	to hv bn	to be ing	but do	wh + to	Sum
	Corpora									
111	Period 1	8	0	0	0	0	0	0	0	8
99	Period 2	20	0	1	1	0	0	0	0	22
98	Period 3	2	0	0	0	0	0	0	0	2
139	Period 4	5	0	0	0	0	0	0	1	6
447	Sum	35	0	1	1	0	0	0	1	38
		無標	the 付き	of 目的語	主語付き	from 先行	完了形			
Gerund	Patterns	- the	+the	+the pp	+ Subj	+ from	+ have			Sum
	Corpora									
111	Period 1	1	1	0	0	0	0			2
99	Period 2	4	4	0	0	0	0			8
98	Period 3	1	0	0	2	0	0			3
139	Period 4	4	2	1	2	1	0			10
447	Sum	10	7	1	4	1	0			23

Clause Corpora	Patterns	無標	有標	関係節	間接 疑問文	Sum
		+that	-that	relative	question	
111	Period 1	23	1	0	3	27
99	Period 2	64	3	1	7	75
98	Period 3	5	5	0	3	13
139	Period 4	36	21	4	21	82
447	Sum	128	30	5	34	197

表2をみると、不定詞補部においては完了形や受動態といった複合形の例が比較的早期のPeriod 2に1例ずつ確認できるものの、それ以降の発達が全く見られず、単純なto不定詞の用例も減少していることがわかる。Rohdenburgの3番目の定義である、the expansion of (subject-controlled, future-oriented) infinitive interrogative clauses at the expense of finite *wh*-clauses (e.g. after verbs like *hesitate*)の指摘のような、to不定詞句によるwh節の代替も殆ど見られない。wh句付きの不定詞の用例はPeriod 4において僅かに1例が観察されるだけであり、定形節がさまざまな形式を発達させているのとは対照的である。

動名詞は、さすがに複合形の発達はまだ確認されないものの、theを伴わない、より動詞性を持った形が少しずつ増加している様子が観察できる。Visser (*HS*, §1120)は初期近代英語期の最も一般的な動名詞句の形は「動名詞+of+目的語」であると述べているが、調査した全時代を通してof

付きの目的語を持つ例は一例のみであり、ここでは状況が異なっている。ofを伴わずに目的語をとるのも動名詞がより動詞的性質を獲得した結果であると思われるが、動詞性を獲得しながら、同時に動詞の命題補部として勢力を拡大していく様子が伺える。

定形節では時代を下るごとにthatを伴わない型やwhatを使用した関係節、間接疑問文の使用に増加がみられ、使用頻度と構造の複雑化の両方に関して発達していく状況がみてとれる。特にPeriod 4で関係節や間接疑問文が発達していることから、この後の後期近代英語においても、更なる発達がみられるであろうことが予測できる。

3. 動詞毎の分析

次に動詞ごとの調査結果をみてみたいと思う。表3は、結果を動詞別にまとめなおしたものである。

表3

admit	to不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	0	0
Period 1	0	0	0
Period 2	0	0	0
Period 3	0	0	0
Period 4	0	0	0

avoid	to不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	6	0
Period 1	0	0	0
Period 2	0	2	0
Period 3	0	0	0
Period 4	0	4	0

consider	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	1	0	101
Period 1	0	0	21
Period 2	0	0	37
Period 3	0	0	8
Period 4	1	0	35

deny	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	6	2	33
Period 1	3	0	2
Period 2	3	1	22
Period 3	0	0	1
Period 4	0	1	8

enjoy	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	0	1
Period 1	0	0	0
Period 2	0	0	0
Period 3	0	0	0
Period 4	0	0	1

escape	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	0	0
Period 1	0	0	0
Period 2	0	0	0
Period 3	0	0	0
Period 4	0	0	0

finish	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	1	0
Period 1	0	0	0
Period 2	0	0	0
Period 3	0	0	0
Period 4	0	1	0

imagine	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	6	0	51
Period 1	0	0	1
Period 2	3	0	13
Period 3	1	0	4
Period 4	2	0	33

mind	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	15	1	8
Period 1	5	1	2
Period 2	9	0	1
Period 3	0	0	0
Period 4	1	0	5

miss	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	4	1
Period 1	0	0	1
Period 2	0	1	0
Period 3	0	2	0
Period 4	0	1	0

practice	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	10	0	0
Period 1	0	0	0
Period 2	7	0	0
Period 3	1	0	0
Period 4	2	0	0

quit	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	0	0
Period 1	0	0	0
Period 2	0	0	0
Period 3	0	0	0
Period 4	0	0	0

stop	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	9	0
Period 1	0	1	0
Period 2	0	4	0
Period 3	0	1	0
Period 4	0	3	0

先に述べたように、14 の動詞のうち、*admit*、*escape*、*quit* の3動詞には用例が見られなかった。一例以上用例が存在した動詞は11であるが、個別にみるとそれぞれ発達過程に様々な差がみられ、全ての動詞を同じように分析することは出来ないことがわかる。

まず、*enjoy*、*finish*、*suggest* の3動詞は用例自体が著しく少ない。*enjoy* と *suggest* は定形節補部の例しか存在せず、それぞれ *enjoy* は Period 4 になって1例、*suggest* は Period 2 においてのみ2例である。それに対して *finish* は Period 4 で動名詞補部を1例とっている。3つの動詞ともに、単純な目的語ではない命題というものをその内部に持つ、補文の使用そのものが未発達であるように思われる。

動名詞の用例しか持たない動詞は、さきほどの *finish* に加えて、*avoid* と *stop* である。*avoid* の方は Period 2 で2例、Period 4 で4例、*stop* はどの時代にも用例を持っている。これらの動詞は他の補部を一切選択せず、動名詞のみという点が興味深い。

practice は異色で、他の動詞と違い Period 2 以降不定詞の用例のみをとっている。

結局、何らかの complement shift が観察できる動詞、言い換えると、2種類以上の補部を従えている動詞は、*consider*、*deny*、*imagine*、*mind*、*miss* の5つの動詞のみであるが、それぞれの complement shift の在り様は決して一律ではない。まず面白いことに、*mind* は Period 1 で動名詞補部をとっているが、以降は不定詞補部のほうが優勢になり、Period 4 では定形節が優勢というように、一般的な complement shift に逆行しているように

suggest	to 不定詞	動名詞	定形節
Sum	0	0	2
Period 1	0	0	0
Period 2	0	0	2
Period 3	0	0	0
Period 4	0	0	0

見える。*miss* は初期の Period 1 において定形節補部の用例がみられるものの、それ以降は動名詞補部に交替する。*deny*、*consider*、*imagine* の3動詞においてだけ、不定詞補部を介在した complement shift が見受けられる。*deny* は Period 2 で不定詞補部と入れ替わるように動名詞補部の用例があらわれるが、全ての時代を通して従え続けている定形節補部が、それら非定形節の補部に何らかの影響を受けたような痕跡は見られない。また、*consider* はどの時代においても定形節補部のみを従えているが、Period 4 で一例だけはじめて不定詞の例があらわれる。余りに用例が少ないので断定は全く出来ないが、初期近代英語以降、この動詞に the first complement shift が起こる可能性はゼロではないかもしれない。最後に *imagine* をみてみよう。この *imagine* は定形節補部と不定詞補部を両方も発達させている様子が伺えるが、動名詞補部は調査した範囲では一例も存在していない。

4. まとめ

以上、*avoid* のように、現代英語において動名詞を目的語としてとるが不定詞を目的語にすることは出来ない14の動詞について、1500年から1710年までの初期近代英語の文献をもとに、不定詞、動名詞、および、*that* 節を始めとする定形節が、動詞の命題補部としてどのような競合関係にあったのか調査した結果を概観した。

全体からわかることをまとめると次のようになる。3種類の補部のうち、定形節補部は全ての時代において圧倒的多数を占めている。時代が下るにつれ構造的に発達していく様子も観察でき、この種の動詞が最も普通にとる形式の補部が、当時

は定形節であったことを示している。Period 4 における用例数の増加率をみれば、後期近代英語にかけて更に定形節補部が発達していくのではないかと予測することが可能である。それとは対照的に、不定詞補部は時代を経るごとに減少の一途を辿っており、構造的な発達もみられない。しかも Period 2 以降は動名詞補部と競合する関係にあると考えられる。こう見てくると、初期近代英語におけるカテゴリー 1 に属する動詞の補文推移においては、最初の予測とは異なり、the first complement shift がほとんど起こらないまま、少なからぬ動詞が初期近代英語中盤の 1600 年ごろから早々に the second complement shift の段階に突入しているといえるのではないだろうか。このよう

な傾向は、現代における用法とは無関係ではないであろう。

大補文推移は、例えば「大母音推移」のような、比較的短期間で一斉に起こったような変化ではなく、かなり長い期間の間に、動詞ごとに起こってきた変化であると考えられる。同じカテゴリーに属する動詞同士を比較しても、それぞれの動詞の発達過程に様々な差がみられ、全ての動詞を同じように分析することは出来ない。それでも、カテゴリーごとの傾向はある程度比較可能であるので、今後は既に調査を終えたカテゴリーや現在調査中の動詞群についても考えあわせ、初期近代英語における命題補部の発達過程の分析を続けたい。

謝辞

Penn Historical Corpora と Helsinki Corpus of Historical English の研究・開発に関わられた全てのメンバーの方々、特に Pen-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English の編者 Anthony Kroch 氏と Ann Taylor 氏、ならびに CorpusSearch2 ソフトウェアの作者 Beth Randall 氏に心からの感謝を申し上げます。

注

*本研究は JSPS 科研費 26580089 の助成を受けたものです。

1) 本論文は、カテゴリー4 に属する 24 動詞を調査した「初期近代英語における動詞の命題補部—特に現代英語において不定詞および動名詞の補部をとる動詞についての定量言語学的アプローチ」に続くものである。(2016年2月に刊行予定)

2) 下の表はPenn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME) コーパスの構成ジャンルと全体に占めるそれぞれの割合を示している。

表		
Text genre	Number of words	Percentage
Bible	133,585	7.7%
Biography, autobiography	36,436	2.1%
Biography, other	50,490	2.9%
Diary, private	127,689	7.3%
Drama, comedy	110,078	6.3%
Educational treatise	110,349	6.3%

Fiction	112,438	6.5%
Handbook, other	105,435	6.1%
History	103,769	6.0%
Law	115,621	6.7%
Letters, non-private	60,771	3.5%
Letters, private	116,423	6.7%
Philosophy	83,208	4.8%
Proceedings, trials	137,249	7.9%
Science, medicine	40,789	2.3%
Science, other	77,446	4.5%
Sermon	93,932	5.4%
Travelogue	122,145	7.0%
Total	1,737,853	100%

3) 使用したコーパスは変形生成文法(原理とパラミターのアプローチ)の枠組みで統語解析されている特殊なファイルなので、直接コンコーダンス調査を行うことが出来ない。従って、調査を行うに当たって、先ず構造的なキーワードを CorpusSearch2 の query ファイルに与えた。具体的には、補部関係であっても、倒置等により語順が変わる可能性があるので、検索対象の最大範囲を主節とし、調査対象の動詞のすべての異形、および、その変化形と可能な補部に統語的に相当する、すべての構成素が調査範囲に含まれるように query ファイルを記述した。CorpusSearch2 は、条件に一部でも該当するテキストとその構造データをすべて出力してしまうため、直接、調査に用いるにはノイズが多すぎて不適切である。そのため、その出力結果を二次コーパスとし、調査対象の動詞のすべての異形、及び、その変化形をキーワードにして、更に AntConc でコンコーダンス調査した。

4) そこで、OED を調べてみると、admit については、1513 年に属格主語を伴った動名詞の例があり、1697 年および 1849 年には定形節の用例が存在する。escape については 1870 年に受身形の動名詞の用例が 1 例存在する。quit は 1754 年以降 1967 年に至るまで、動名詞の用例ばかり 9 例確認できた。どの動詞においても不定詞を直接補部として従えている例は確認することが出来なかった。

参考文献

- Anderson, M. 1983. "Prenominal Genitive NPs," *The Linguistic Review* 3. pp. 1–24.
- Bloomfield, L. 1933. *Language*, New York: Henry Holt.
- Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. 安井稔訳『文法理論の諸相』(1970) 研究社.
- Chomsky, N. 1972. "Remarks on Nominalization", in Chomsky(ibid) *Studies on Semantics in Generative Grammar*. 安井稔訳“名詞化管見”『生成文法の意味論研究』(1976) 研究社. pp. 3–75.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chomsky, N. 1986. *Barriers, Linguistic Inquiry Monograph 13*. MIT Press.
- Chomsky, N. 1991. "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in Freidin (ed.) *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. MIT Press. pp. 417–670.
- Chomsky, N. 1992. "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in *MIT Occasional Papers in Linguistics 1*. MIT Press.
- Chomsky, N. and H. Lasnik 1991. "Principles and Parameter Theory," ms.
- Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Curme, O. 1933. *Syntax*. Heath / Maruzen.
- Fries, C.C. 1952. *The Structure of English*. Prentice Hall Press.
- Greason, H.A., Jr. 1965. *Linguistics and English Grammar*. Rinehart and Winston.
- Grimshaw, J. and A. Mester. 1988. "Light Verbs and θ -marking." *Linguistic Inquiry* 19. pp. 205–232.
- Iyeiri, Yoko. 2010. *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jackendoff, R. 1977. "X' Syntax: A Study of Phrase Structure," in *Linguistic Inquiry Monograph 2*. Chapter 2, 3, 5, 6, 8. MIT Press. pp. 9–220.
- Jespersen, O. 1909—1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Allen and Unwin.
- Jespersen, O. 1924. *Philosophy of Grammar*. Allen and Unwin.
- Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. Allen and Unwin.
- Johnson, K. 1988. "Clausal Gerund, the ECP and Government." *Linguistic Inquiry* 19. pp. 583–608.
- Nakajima, H. 1990. "Secondary Predication." *The Linguistic Review* 7. pp. 275–309.
- Pollock, J.Y. 1989. "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP." *Linguistic Inquiry* 20. pp. 365–424.
- Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- Quirk, R. et al. 1973. *A University Grammar of English*. Longman.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Roberts, I. 1988. "Predicative APs." *Linguistic Inquiry* 19 pp. 703–710
- Rothstein, S.D. 1991. "Binding, C-Command and Predication" *Linguistic Inquiry* 22. pp. 572–578.
- Rohdenburg, Gunter. 2006. "The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complement System." *Syntax, Style and Grammatical Norms: English from 1500—2000* ed. by Christiane Dalton-Puffer, Dieter Kastovsky, Nikolaus Ritt, and Herbert Schendl, 143-166. Bern: Peter Lang.
- Stowell, T. 1989. "Subjects, Specifiers, and X-Bar Theory" in Baltin and Knoch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. The University of Chicago Press. pp.232–262.
- Sweet, H. 1898. *A New English Grammar, Logical and Historical*. Cambridge University Press.
- Visser, Frederikus Theodorus. 1963-73. *An Historical Syntax of the English Language*; 3 Parts in 4 Vols. Leiden: E. J. Brill. [cited as Visser, *HS*]
- Vosberg, Uwe. 2003b. "Cognitive Complexity and

the Establishment of -ing Constructions with Retrospective Verbs in Modern English,” in Jones, Charles/ Dossena, Marina/ Gotti, Maurizio (eds.) *Insights into Late Modern English*. Bern: Lang, 197-220

Williams, E. 1980. "Predication." *Linguistic Inquiry* 11. pp. 203 – 238.

Williams, E. 1983. "Against Small Clauses." *Linguistic Inquiry* 14. pp.287 – 308.